図183　遺跡の位置
５万分１地形図「内野」

緒立遺跡　西区黒鳥・緒立流通一丁目・緒立流通二丁目

緒立遺跡は西川右岸、低地帯の中の小砂丘上にある。遺跡の推定範囲は東西約五〇〇メートル、南北約一〇〇メートルで、面積は近くにある的場遺跡（一三六ページ）の約四倍である。これまでに何度も発掘調査が行われ、縄文時代晩期から中世まで断続的に営まれた遺跡であることが確認された。ここでは、弥生時代と古墳時代について記す。

弥生時代では、墓地と推定される場所から数千点を超える焼けた人骨片が見つかった。弥生時代前期から中期（約二三〇〇～二〇〇〇年前）のものと考えられ、分析の結果、成長期に犬歯などを抜く「抜歯」の風習があったことが分かった。また、人骨の破片には、穴の開けられているものもあった。穴に紐を通して、ペンダントのように身に付けていたと推定されている。骨のペンダントは、護符として使用されたのであろう。

図184　穴が開けられた人骨　焼かれている　左上の長さ4.1センチメートル

緒立遺跡から出土した弥生時代前・中期の土器は、縄文時代の伝統を引く沈線模様（変形工字文など）と縄文が付けられているものが大半であり、「緒立式土器」と呼ばれている。緒立

式土器は東北地方中・北部の土器と類似点が多く、弥生時代になって、東北地方から新たな土器作りの技術が伝わってきたことを示している。一方、縄文がない東海地方や北陸地方の系統の土器はわずかしか出土しておらず、この地域の縄文土器から弥生土器への変化は、東北地方の影響を受けながら進んだと考えられる。緒立遺跡は弥生時代後期には、いったん途絶える。

図185　緒立式土器　右端の高さ40.4センチメートル

古墳時代前期（三世紀中ごろ～四世紀初頭）、再び集落が形成され、遺跡の中央には緒立八幡神社古墳が築かれる。古墳の上には現在、緒立八幡宮が建っている。古墳は、墳丘の斜面が石で覆われた直径約三〇メートルの円墳で、前期の古墳である。墳丘の斜面を覆う石は乱雑に並べたのではなく、一定の規則に従って並べられている。まず、墳丘の裾（すそ）部に弧状に大形の石を並べ、次にそこから墳丘中心部に向かって放射状にやや大形の石を並べて区画を作り、最後に区画の中を充填（じゅうてん）するように石を並べている。このような石の並べ方は近畿地方の古墳にも見られるものである。墳丘の斜面を覆った石には、古墳を荘厳に際立たせる効果があった。

遺体が葬られた埋葬部分は、八幡宮の社殿の下に位置してお

り調査されていない。また、遺体と一緒に埋葬された副葬品についてもよく分かっていないが、本殿のわきから出土した大形の壺は、口縁部を除きほぼ完全な形で見つかったことから、古墳に伴うものと考えられている。緒立八幡神社古墳は、信濃川下流域の低地帯に築かれた唯一の古墳であり、被葬者は周辺の水上交通を掌握した首長であろう。

図186　緒立八幡神社古墳の葺き石　昭和56年調査

緒立遺跡は、古墳のある緒立八幡宮境内と隣接地の計約五三〇〇平方メートルが県の史跡に指定されている。また、縄文時代晩期～弥生時代中期と古墳時代前期の土器は、市の文化財に指定されている。

図187　本殿わきから出土した壺　口縁部が失われている　胴部直径約41センチメートル